



2007年4月25日

日本応用心理学会ニュースレター

——コミュニケーションの広場——

No. 17

日本応用心理学会第74回大会のご案内

大会委員長 蓮花 一己

先日、大会通信でお知らせしましたように、日本応用心理学会第74回大会は、奈良にあります帝塚山大学でお引き受けすることになりました。開催日時は、2007年9月8日(土)、9日(日)の2日間です。帝塚山大学学園前キャンパスは近鉄奈良線学園前駅から徒歩1~2分にあり交通の便が良いところですのでふるってご参加をお願い申し上げます。また、少しお時間をお取り頂いて、奈良の世界遺産や文化財に触れて頂ければと思っております。

大会企画シンポジウムでは、「災害リスクの認識と対応：心理学がとらえる過去、現在、そして未来」というテーマで、災害時の避難生活、リスクコミュニケーション、マスコミ等の問題を取り上げて話題提供と議論を行う予定です。また、特別講演として、フィンランド・トゥルク大学のケスキネン教授をお招きして、交通心理学分野での運転行動の階層モデルとヨーロッパの運転者教育への展開について概観して頂きます。いずれも各分野での新鮮な知的刺激となり、活発な議論がなされることを期待しております。学会研修会では、神作博先生(中京大学名誉教授、学会名誉会員)と井上孝代先生(明治学院大学教授)のお二人の講師をお迎えしてお話を伺うことになりました。これらの研修会にも積極的なご参加をお願い致します。

さて、今回の発表で前回大会と異なる点は、ポスター発表だけでなく口頭発表を復活させたことです。分野ごとの口頭発表では発表者と参加者の直接的な討論の場として活用して頂きたいと思えますし、ポスター発表は、個別の詳細な質疑や相互の情報提供やネットワークづくりに活かしてもらえたらと考える次第です。ワークショップは前回大会に引き続いて、会員からの提案に基づいて、いくつか企画される予定です。ぜひ積極的な企画の提案をお願い申し上げます。



会期中に大学では建物の補強工事等の日程が入っておりますので、会員の皆様には何かとご迷惑をお掛けすることがあるかと思っておりますのでお許し下さい。なお、すでにお知らせしたとおり、懇親会は奈良公園に面した奈良ホテルで開催致します。大学からはバスでホテルまでお連れ致します。さらに、国際会議に倣って、会員の同伴者の出席も歓迎致しますので、ぜひご夫婦お揃いで懇親会にお越し頂ければ幸いです。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

目次

1. 2007年度大会(第74回大会)のご案内 ……	1	4. 各委員会からのお知らせ	
2. 日本応用心理学会設立60周年記念事業のご紹介 ……	2	①機関誌編集委員会 ……	7
3. 会員の活動報告		②学会賞・奨励賞選考委員会 ……	8
①馬場房子会員の亜細亜大・最終講義 ……	4	③企画委員会 ……	9
②垣本由紀子会員の実践女子大・最終講義 ……	5	④国際交流委員会 ……	9
③図書紹介：吉田信彌会員著『事故と心理』(中公新書) ……	6	⑤応用心理士認定審査委員会 ……	10
		5. 帝塚山大学・心理学教室の紹介 ……	11
		6. 事務局だより ……	12
		7. 編集後記 ……	12

日本応用心理学会設立 60 周年記念事業のご紹介

広報委員会

本学会は、設立 60 周年を記念して、この度『応用心理学事典』(丸善)を発刊いたしました。この事典は、本学会の役員によって各分野の重要な項目が選定され、約 240 名にわたる会員の執筆協力を得て編さんされました。本学会の貴重な知的財産が集積されたこの事典は、細分化された現代心理学の諸分野の研究水準を浮き彫りにし、会員の皆さまをはじめとした心理学研究者にとって今後の研究活動のため大変有益な情報を数多く提供するものであると確信いたします。すでに会員の皆さま方には、本事典に関するご案内の文書が届いていることと存じます。本誌では事典のご案内に加えて刊行にあたっての岡村理事長挨拶と去る 2 月 23 日に東京・高田馬場で約 50 名の参加者によって行われた出版記念パーティーでの高嶋正士名誉会員(共立女子大学名誉教授)による特別講演について、ご紹介いたします。

【岡村一成・本学会理事長による本事典の「刊行によせて」から抜粋】

人は人の「こころ」について大きな関心を寄せています。むかしから「こころ」とはなにか、「精神」とはなんだろうという議論が盛んに行われていました。心理学の歴史をたどると、人間が地球上に現れたときにまでさかのぼってしまうほどです。

近年、若い人たちの間で、「心理学」が大変ブームになっています。マスコミでも心理学に関したテーマがよく取り上げられています。好奇心の強い若者

たちが「こころ」というテーマに深い関心を寄せていることがわかります。しかし、巷にはこころを探索するゲーム感覚の本や占いの、興味本位のもが多く氾濫し、科学としての心理学に対する誤解を生じさせています。また、一般に心理学というと、カウンセリングなど心理臨床関係の研究や実践と思われるなど、心理学に対する関心に偏りもみられています。

現代の心理学はその研究領域も極めて広く、人間行動のあるところすべて心理学の研究分野であるというほど、私たちの生活に密着した学問になっています。そして、心理学の研究は社会の具体的な問題解決に大きな役割を担っているのです。

わが国の応用心理学的研究活動は 1920 年頃からすでに芽生え始めておりましたが、心理学の学会は「日本心理学会」に限られていて、いわゆる実験・基礎の研究が中心でした。このような中で、心理学の研究が社会の具体的な問題解決に資することを目指して、広い専門領域の研究者を糾合して 1936 年に設立されたのが「日本応用心理学会」でした。第二次世界大戦中(1941~1945 年)はその活動を停滞していましたが、戦後 1946 年(昭和 21 年)に復興第 1 回大会が開催され、以来本格的な学会活動が展開されてきました。学会の復興当初は、その組織の中に、教育心理部会・臨床心理部会・産業心理部会・犯罪心理部会・相談部会など多岐にわたる部会を持っていましたが、やがて心理学が多くの分野に分化して発展するようになり、これらの部会はそれぞれ 1 つの学会として独立していきました。今日、心理学関連の学会はゆうに 40 を超え、心理学の研究は細分化の傾向を強めつつあります。

このような状況にあっても、日本応用心理学会は、今もさまざまな領域の会員を擁し、学会の志と長い伝統を大切に実績を上げており、心理学界全体の発展にとってその役割は極めて大きいものと思われます。そこで、日本応用心理学会では設立(復興)60 周年を記念して、現代の心理学が多くの分野に分化し、応用され発展してきた内容を、わかりやすく解説し、身近な学問として正しく理解してもらうことを狙いとして、この『応用心理学事典』を企画いたしました。ここでは、現代心理学の代表的な応



用領域を15分野で精選しました。心理学に興味を持ち、心理学の応用知識を得たい人や、ご自分の専門分野以外で知りたいことのある人が学びやすいように工夫されています。また、中項目主義をとっており、現代の応用心理全般を眺望できる読み物としても活用できます。心理学に関心を持つ人びとが、心理学に対する偏った知識をなくし、心理学により興味を抱かれ、社会においてさまざまな問題解決に役立てていただきたいと願うものであります。



【高嶋正士名誉会員の特別講演について】

先生は共立女子大学において約50年間、研究・教育に従事され、現在は同大学の名誉教授であります。定年後は郷里の新潟県に戻られ、寺の住職、病院臨床などのお仕事をされているとのこと。特別講演では、これまでの人生を振り返りながら心理学を学ぶことになったきっかけ、心理学と仏教との接点など大変興味深いお話をして下さいました。

特に、先生が現在関わっておられる新潟県・長岡西病院のビハーラ病棟でのお話は、ガン患者のターミナルケア（末期医療）における臨床的問題として含蓄のあるものでした。ビハーラ(vihara)とは、サンスクリット語で「身も心も安んじる」という仏教伝道本来の働きを意味する言葉で、1985年に田宮仁によって提唱された理念であると、先生は『応用心理学事典』（丸善）の中で述べられております。

ビハーラ病棟とは仏教の理念に基づいて緩和ケアを行う病棟であり、病棟の医療関係者には、末期患者やその家族の精神的な不安や苦痛に寄り添い、それらを和らげ、安住を促し、ともに生き抜こうとする力の支えになることが求められるとのこと。ガンの告知に際して、告知した医者が患者や家族と一緒に本当に苦しめるのか、一緒に涙を流せるのかということが重要であり、告知した後の医者への対応が大変重要であることを先生は「共存、共苦、共涙、共悩」という言葉を用いて強調されました。

現代は病院で多くの機械に取り囲まれ、家族との十分な交流がないままに寂しい孤独な死を迎える人が多くなっております。「看取る」という言葉がよく使われますが、これは「患者の目を見る、手を握る」ということであると先生は仰いました。ターミナルケア、ホスピス、ビハーラという言葉やその理念に



基づく行動は、死に向かいつつある人がまだ人生の大切な時間を生きている人であるということを重視し、また患者本人もそう感じるような人間的看護を行うことが大切であるとのこと。

患者の家族と医療者たちが生と死の問題を自らの問題としてとらえ、生き生きとその人らしく生きるために患者を暖かく看取り、看取りを通して自己を見つめ、命の尊さに気づくことが何よりも大切であることを先生は力説されました。

先生はこれまでの人生の中で人と人との不思議なつながりを感じておられるとのこと。そして人と人との出会いが現在の自分を支えてくれているとのこと。親との会話のない子どもたちの不健康さなどに見られる「ホウ・レン・ソウ病」(ホウ→報告がない、レン→連絡がない、ソウ→相談がない)は、現代社会の病理現象の一つであり、コミュニケーションの重要性を重ねて指摘されました。

(文責：所 正文)

馬場房子先生の「亜細亜大学・最終講義とこれまでの功績のご紹介」

1. 先生の最終講義

亜細亜大学経営学部教授馬場房子先生の最終講義が、2007年1月15日(月)4時10分より、亜細亜大学2号館200番教室において、「働く人々のモチベーション」というタイトルで行われました。

馬場先生は1966年に亜細亜大学商学部(現経営学部)に、専任講師として奉職されて以来足掛け41年間お勤めになられました。この間、学部では「心理学」や「組織心理学」・「消費者行動論」や大学院では「経営心理学」・「消費者行動論」・「経営学特殊研究」などを担当されました。

最終講義では、若いころから興味をもっておられたという動機づけについてお話いただきました。

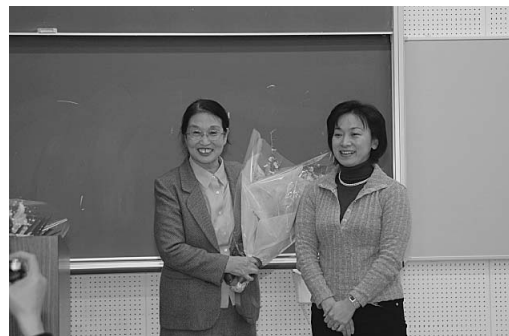
最初に、「行動のなぜ」という問題テーマで、行動のエネルギーの源や、その方向と持続性についてお話され、動機づけに関する理論を概観された後、心理学と経営学の接点について、科学的管理法や人間関係論、そして、行動科学と人事制度などについてお話をいただきました。

特に動機づけの諸理論の紹介の中では、先生のお人柄を象徴するようなブライトサイドの理論であるマズロー(Maslow, A. H)の要求五階層説を取り上げられ、自己実現の内容について図を交えてご説明になりました。そして、そこから出発した、自己実現人を超えた超自己実現人について、先生のご自説であり理想のモチベーション理論といわれる「B理論」について、そのことを内観(イントロスペクション)や他者を観察することを通して展開するにいった経緯や、マズローのBバリューズに関連した“非常に成熟した価値”の内容を、元JR東日本会長の山下勇氏を例に引きながら「バランス感覚」という言葉で詳しくご紹介され、「人間が健康に生き幸せになるためには、相手も立てて自分も生きるっていう生き方をしないとハッピーにならない」という言葉で講義を結ばれました。

この最終講義には、多くのゼミのOB・OGが参加され、講義の後、多くの花束に囲まれて記念写真の撮影が繰り返された後、会場を移してゼミ主催のなごやかな記念パーティーが、行われました。

2. 功績

馬場房子先生は、ごく初期には心理学プロパーの論文をお書きになられたり学会発表をされてお



すが、亜細亜大学に就職されて以後は、産業・組織心理学の領域でのご活躍が主であります。

主要な著作は、『消費者心理学(第2版)』(1989年 白桃書房)、『働く女性の心理学(第2版)』(1996年 同)など単著6点をはじめ、馬場昌雄先生との共監著『産業・組織心理学』(2005年 同)そして、20冊を超える共著や数多くの学術論文、学会発表、辞書・辞典類の項目執筆がおありになります(詳しくは、亜細亜大学『経営論集 馬場房子教授退職記念号』(2007年3月)を参照ください)。また、今年4月には、ゆまに書房より共著『働く女性のライフイベント』が出版されるなど、旺盛な執筆活動をされております。

学会関係では本学会の常任理事や常任運営委員、産業・組織心理学会の副会長や常任理事をはじめさまざまな学会で役員を歴任されたり学会を開催され、それ以外にも文科省や経済産業省関連の委員、東京都などの自治体の各種委員など数多くの社会的な貢献もされております。

(亜細亜大学教授 小野公一)

垣本由紀子先生の「実践女子大学・最終講義と功績のご紹介」

1. 先生の紹介と最終講義

先生は早稲田大学第一文学部・心理学専攻のご出身であり、医学博士を取得され、長らく防衛庁・航空医学実験隊に勤務されました。退官後は鹿児島県立短大に3年間勤務され、その後実践女子大学に移られ7年間在職し、今春定年を迎えられました。本学会の常任理事でもあります。自己紹介によれば「趣味はスキーですが、万年2級で足前は今ひとつです。ちょっと変わった経験と言えば、ヒマラヤ登山隊に参加したこと、ファイター練習機に2度ほど搭乗したことがあります。ウィークポイントは目玉と喉です。これまで、長く航空機操縦者のストレスと作業負担について、航空や交通の場面で研究をしていました」ということですが、健康に自信のない筆者にとって、垣本先生と言えば「かぜ一つ引かないで、何事もやり遂げる、パワフルで気さくな先生」です。とても古希を過ぎたとは思えません(左の写真)。

最終講義は、平成19年1月16日(火)13時～14時に実践女子大学の教室で行われました。教室は200人収容でしたが、ほとんどの座席が埋め尽くされるほどの盛況ぶりでした。私も女子学生の中にまぎれて、他の学会関係者とともに最終講義を拝聴しました(右の写真)。

先生のお話は「ヒューマンエラーと航空機事故」で、旧防衛庁の航空医学実験隊の頃のご研究や、実践女子大学に移られてから女性初の委員として就任された国土交通省の航空・鉄道事故調査委員会でご得た経験・知識の一端をお示しいただきました。同委員会における女性初の委員としての先生のご活躍が、読売新聞全国版「時の人」の中で紹介されこと

をご記憶の方も多いと存じます。

2. 功績

主な著書としては、「航空心理学入門: 飛行とところ、鳳文書林(共著)、1978」、「社会的かかわりにおける運動行動: 障害・高齢化・国際化を中心に、東海大学出版会(共著)、1999」があります。最近では「応用心理学の現在、北樹出版、2001」、「ヒューマンエラーの科学 なぜ起こるか、どう防ぐか、医療・交通・産業事故、麗澤大学出版会、2004」、「人間工学の百科事典、丸善、2005」、「事例で学ぶヒューマンエラー そのメカニズムと安全対策、麗澤大学出版会、2006」、「応用心理学事典、丸善、2007」を分担執筆されています。また、ヒューマン・エラー、パフォーマンス、作業負荷、疲労、身体計測、交通安全等に関する多数の論文があります。

社会的貢献としては、航空・鉄道事故調査委員としての期間中(2001年2月22日から2007年2月21日)、すべての航空機事故および重大インシデントの審議に加わり、約200件の調査報告書の作成に加わったことが特筆されます(報告書はインターネット上で公表)。さらに、日本応用心理学会、日本人間工学会、日本交通心理学会、日本宇宙航空環境医学会等で役員をされたばかりでなく、アメリカの米国航空宇宙医学会で副会長を務められ、現在はそのフェローになられているなど国際的に活躍されております。交通心理学、人間工学分野でのわが国における初の女性研究者としての垣本先生のご功績は多大であり、今後も引き続き後進のご指導をよろしくお願いしたい次第であります。

(実践女子大学教授 松浦常夫)



中公新書『事故と心理』(2006年8月26日発行)を著して

吉田信彌(東北学院大学)

啓蒙に墮することなく 中公新書には鶴田正一(著)『事故の心理』というロングセラーがあった。昭和43年の発行であるので誰かが新たな本を書かなくては、と学会の懇親会のおりに話がでたのは10年ほど前だったのだろうか。まさかその任を私が負うことになるとは思わなかった。

伝統ある中公新書を書くのは重い仕事であった。中公新書・中公新書ラクレの解説目録の末尾に梅棹忠夫氏の一文がある。そこに「一般市民を讀者として予想しつつも、啓蒙に墮することなくこの新書一冊をまとめあげるには、ものすごい力量がいる」とある。この「啓蒙に墮することなく」がずっしりとくる。というのも、とかく「これが危ない」「これも気をつけろ」というだけの話になることが交通心理学には多いように思っていたからである。

心理学が一般に広まった今日、心理学の知見を応用するというだけではなく、交通心理学が担う独特な立場も前面に出して書けるようになった。その点が鶴田先生との違いだろう。拙著のいくつかの主題の中から交通心理学の学術理論的にも挑戦的な面についてここでは述べよう。それは交通心理学がよく使う事故数という指標に関する点である。

心理テストの外的基準としての事故数 質問紙法や投影法による心理テストが実際の行動を予測しないことは心理学者の間では常識となりつつある。行動を予測しないテストにどのような価値があるのかという素朴な疑問は無視して、テストの内的な妥当性をもっぱら追求し、外的基準との整合性を横に置

くのが今のパーソナリティや社会心理学の趨勢だろう。

これに対して、交通心理学の心理テスト(適性検査)は事故数を外的基準にとり、この外的基準を重視してきた。外的基準重視が交通領域の検査の特徴である。

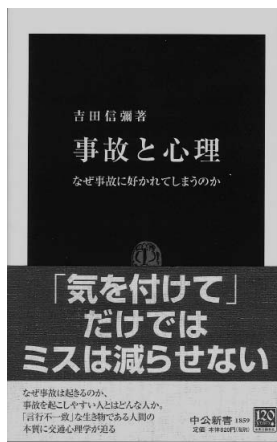
事故が起きるには当人の行動だけでなく、相手の要因も大きいし、偶然の重なりによることもある。それゆえに適性検査が測定する特性から行動の結果である事故を予測するのは無謀でさえあるのだが、それでも結果として、交通分野の適性検査は事故多発者群と無事故者群とを統計的に弁別したし、そのような検査を開発してきた。事故多発者を予測し事前に排除するという検査開発初期の実用的な目的は今日では意味をなさなくなったが、事故者と無事故者を弁別するならば、その検査は事故に関与する何かを測定するといえる。両群を弁別することを適性検査の要件とするような風潮がこの分野にはある。

外的基準を優先する交通心理学では、検査と行動との関係も当然ながら検討してきた。ビデオの発達と普及のおかげで運転行動の研究は進歩し、質問紙検査よりも作業検査が運転行動と相関することも知見として得られた。

交通心理学は歴史的に産業心理学から分派したが、もう一方の分派である産業・組織心理学とは外的基準の扱いは対照的である。わが国の産業・組織心理学会は意識調査が主であって、その意識が実際の行動と、さらにもっとも大事であろう組織の生産性とどう結びつくかというような外的基準との関連性の検討はなされないようである。

拙著では適性検査の代表として速度見越反応検査を取り上げた。一般向けの書であるので「検査の妥当性」という言葉は使わなかったが、その妥当性の検証の方法は、心理学者の間で広く知られてよいと思う。そこには外的基準の重視と検査時の反応のメカニズムを解き明かす工夫を読み取れると思う。

時代の趨勢としての事故数 拙著では事故数を個人の指標としてだけでなく、時代の趨勢を探る道具として使った。そのとき社会の中でどのような情報が広まり、それに個々人がどう行動し、その反映としてどのような事故や死者の増減があったのかを問



う。情報—行動—事故統計の三項で考える枠組みを提唱した。扱ったのは左折時死亡事故と昨今の死亡事故の減少であった。

実験心理学などを専攻する純粋な心理学者から見ればそのような枠組みは経済学か社会評論であり、心理学とは違う、と疑問に思うかもしれない。しか

し、心理学に限らず人間を扱う科学は、個人の行動だけでなく時代を読み解いてこそ、である。たんに事故防止の算段を説くだけでなく、事故が増加し減少する歴史を統合的に説明してこそ交通心理学は価値ある科学となるのではないだろうか。

機関誌編集委員会からのお知らせ

委員長 藤田 主一 (日本体育大学)

1. 本学会機関誌「応用心理学研究」は現在、年間 2 号 (春期、秋期) を発行しています。機関誌は会員の皆様の投稿によって成り立っています。投稿論文は常時受け付けていますので、下記の「編集事務局」宛にふるって投稿してください。なお、現在の編集体制では、おおよそ 4 月末までに投稿された場合は「秋期号」、10 月末までの場合は「春期号」に向けて審査が行われます。審査に時間がかかり、次号に先送りされる場合がありますので、投稿される場合は、ゆとりをもって早めをお願いします。
2. 機関誌「応用心理学研究」の投稿・執筆規程、編集規程が新しくなります。次号 (第 32 巻第 2 号) に掲載しますので、以後の投稿につきましては、新規規程を参照してください。また、学会ホームページにも同様に掲載します。本学会では、機関誌には邦文のほかに英文による投稿も可能です。執筆方法は、邦文の規程に準じます。こちらにもふるって投稿してください。
3. 新編集規程にも記述されますが、従来の論文形態 (原著論文、資料論文、総説論文など) のほかに、「短報論文」と「実践報告」の形態を新設します。短報論文は、機関誌の見開き 2 ページを 1 論文とする形式です。短報論文のコンセプト、投稿・執筆方法につきましては、別添の内容を参照してください。
4. 実践報告は、本学会会員が応用心理学の現場で取り組んでいる活動等を、論文の形式で投稿するものです。現場からの活動成果、メッセージ、新たな視点などを切り口に論述してください。執筆方法は、新投稿・執筆規程に準じますが、科学的研究論文の形式にこだわられません。会員の皆様が日々取り組んでいる活動等を、応用心理学の立場からまとめてください。なお、実践報告も審査の対象になりますので、会員の皆様

からの多数の投稿をお待ちしています。

【投稿先】

〒158-8508 東京都世田谷区深沢 7-1-1

日本体育大学教職教育 II 研究室内
日本応用心理学会「機関誌編集」事務局 宛

TEL & FAX 03-5706-0924

E-mail: sfujita@nittai.ac.jp

短報論文の新設について

日本応用心理学会機関誌「応用心理学研究」に短報論文の欄を新設します。短報論文の新設目的は、新しい研究内容を簡潔にまとめ投稿しやすくすること、また迅速審査で機関誌に掲載できるようにすることです。以下に、短報論文のコンセプト、投稿・執筆の方法等を略記しましたので、精読の上、ふるって投稿してください。

1. 短報論文として投稿できるのは、投稿者全員が本学会会員に限りませんが、本学会の会員であれば誰でも投稿できます。
2. 短報論文への投稿は、応用心理学に関する未公刊の論文であることが必要です。これには、新規の執筆論文のほかに、修士論文、学会発表、研究会発表などの研究をまとめた論文などが該当します。
3. 1 論文の長さは、図表・文献を含め、「応用心理学研究」の印刷済で見開き 2 ページとします。1 論文を 2 ページで紹介します。1 ページの文字数は、26 字×51 行×2 段=2,652 字です。2 ページの合計 5,304 字の範囲で、完結した 1 論文にします。
4. 短報論文は、科学的論文の要件を満たすことが必要です。1 ページ目の上段左側に論文名、著者名、所属機関、上段右側の同スペースには英文アブストラクト (100 語程度) を印刷する予定です。以下、本文は目的、方法、結果、考察、文献の欄に分けて執筆します。図表は適宜、挿

入してください。見開き2ページを有効に利用します。論文(含: 図表・文献)が2ページの範囲に収まるかどうかを、学会年次大会の発表論文集の形式を参考に確認してください。科学的論文の要件を満たすこと、英文アブストラクトを付加することが条件です。原稿は、上記の条件をよく考慮して投稿してください。印刷済で2ページを超過する場合には受稿できませんので、文字数についてはとくに注意してください。

5. 短報論文は、原著論文・資料論文など同様に、査読者による審査があります。したがって、学会誌のレフリー論文になります。審査は、学術論文としての研究水準はもちろんですが、それ以上に、研究観点の面白さ、論旨の明快さ、簡潔な内容、研究の発展性などを中心に審査します。修正再投稿を求められたり、残念ながら不採択の場合もありますので、あらかじめ了承ください。また、短報論文として掲載された論文に、新たなデータの追加・再処理、論考を加えて、原著論文、資料論文として再投稿することができます。

6. 短報論文への投稿は、原稿を編集事務局宛に3部提出してください。ただし、そのうちの2部は著者名、所属機関を伏せたものにしてください。仮に、見開き2ページにレイアウトした原稿があれば、合わせて同封してください。こちらは義務ではありません。なお、本学会では、電子投稿を受け付けておりません。
7. 短報論文は迅速審査をモットーにします。したがって、その号の「応用心理学研究」が発行可能なギリギリの時間まで、審査結果を待つことができます。
8. 短報論文は、「応用心理学研究」第33巻第1号(2007年秋期号)の掲載分から、原稿を募集します。この号への論文審査を希望する会員の方は、2007年6月末ごろまでに、ふるって投稿してください。

学会賞・奨励賞選考委員会 からのお知らせ

委員長 萩野 七重 (白梅短期大学)

1. 「学会賞・奨励賞選考委員会規程」と「学会賞・奨励賞選考規程」の改訂の経緯

先のニューズレター16号において、常任理事会は、「日本応用心理学会学会賞・奨励賞選考委員会規程」と「日本応用心理学会学会賞・奨励賞選考規程」の見直しを行うことをお知らせしました。その理由は、“学会賞・奨励賞は、応用心理学の振興と発展を図る”ことを目的として設けられたにもかかわらず、2006年度「日本応用心理学会 学会賞・奨励賞」は該当者なしという結果であったこと、しかも同じ結果が、学会賞は2年、奨励賞は3年間続いたことにあります。ご承知のとおり、日本応用心理学会の学会賞・奨励賞は、理事および名誉会員の推薦をもとに、学会賞・奨励賞選考委員会による第1次選考と、常任理事会による第2次選考によって行われてきました。しかしながら、近年、理事および名誉会員による推薦が著しく減少し、推薦を得ること自体が困難になってきているのが現状です。

このように低迷している状況を打開するために、学会賞・奨励賞委員会を中心に規程の見直しと改訂案の作成が行われ、8月の常任理事会の審議を経

て、新しい「日本応用心理学会学会賞規程(案)」と「日本応用心理学会学会賞選考細則(案)」が承認されました。しかしこの案は、応用心理学会の大会時に開催された理事会(2006年9月8日)での十分な支持を得るに至らず、決定を持ち越すことになりました。しかしながら、常任理事会は、少しでも早期に新規による実施が望まれるため、常任理事会でさらに検討を重ねたうえで、新規程案を2007年1月に全理事に郵送し、可否を問う形での審議を進めることを承認しました。その結果、新規程案に対する理事の反対意見は全くなく、2月の常任理事会において、この規程を2007年度4月1日より施行することが承認されました。

2. 新「日本応用心理学会学会賞規程」および「日本応用心理学会学会賞選考細則」

新しい規程の最大の変更点は、従来の「学会賞」と「奨励賞」という2種類の賞を「学会賞」に1本化し、「論文部門」と「実践活動部門」の2部門のそれぞれについて、受賞者を選考するという点です。論文部門は、本学会機関誌「応用心理学研究」所載の過去2年間の論文を対象とし、実践活動部門は、応用心理学の知見を生かした社会的実践活動を行っている会員を対象とします。選考は2年に1回、「学会賞選考委員会」が、理事の推薦をもとに行う第

1次選考と、それを受けた常任理事会の第2次選考によって行われます。選考委員会は当該年度のみ設置され、副理事長を委員長とする7名(上限)によって構成されます。

新規程は2007年4月に発足しますので、2008年度に新規程による最初の学会賞選考が行われることとなります。

企画委員会からのお知らせ

委員長 内藤 哲雄(信州大学)

当委員会では、2007年度も公開シンポジウムと学会大会時研修を企画いたします。また、2007年度には新規企画についても検討を開始する予定です。

1. 公開シンポジウム

2006年度の企画が、下記のように4月にずれ込んで開催されます。2007年度公開シンポジウムについては、2007年11月に開催する予定ですが、テーマ等については目下検討中です。

- テーマ: 過重負担の医療・福祉従事者をどう支援するか?
- 概要: 今、医療・福祉の現場で何が起きているのか。次々に押し寄せる課題。過重負担にあえぐ職員。精神的にも身体的にも破綻寸前。福祉従事者、管理者、医師が現状を報告し、施設外部評価者、看護教員、社会福祉の専門研究者が問題の背景を解きほぐし、現場従事者と研究者がともに喫緊の課題の解決策を探る。
- 司会: 大橋信夫(日本福祉大学)・内藤哲雄(信州大学)
- 話題提供者: 峯尾武巳(神奈川県立保健福祉大

学)・吉方りえ(医療法人社団順聖会吉方病院医師)・山川庸介(児童養護施設まっば園保育士)・安藤真智子(東京都渋谷区子ども家庭支援センター専門相談員)

●指定討論者: 井上孝代(明治学院大学)・松下由美子(山梨県立看護大学)

●開催日時: 2007年4月14日(土) 13:30~16:30

●開催場所: 明治学院大学 本館1201教室

●参加自由(無料)

2. 研修について

本年度開催される第6回研修会は、帝塚山大学での第74回大会期間中に下記のように実施されます。

①研修会 A

●テーマ: 社会における応用心理士の使命と課題・留意点

●日時: 9月8日(第1日目) 15:30~17:00

●講師: 神作 博氏(中京大学教授)

●司会: 向井希宏氏(中京大学教授)

②研修会 B

●テーマ: コンフリクト転換のカウンセリング

●日時: 9月9日(第2日目) 14:50~16:20

●講師: 井上孝代氏(明治学院大学教授)

●司会: 藤 武彦氏(和光大学教授)

国際交流委員会からのお知らせ

委員長 蓮花 一己(帝塚山大学)

前回に引き続いて応用心理学関連分野での国際学会についてご案内いたします。今回は、平成19年度下半期、および平成20年度に開催される国際会議・学会をお知らせいたします。本学会における交通心理学分野の会員の方が、これまでも数多く参加・発表されている国際交通・運輸心理学会(第4回)が来年8月末にアメリカで行われますので、ご注目下さい。

2007年9月25日~29日

42nd Annual Conference of the Australian Psychological Society

開催地 オーストラリア、Queensland, Brisbane
www.apsconference.com.au

2007年10月3日~6日

Xth European Conference on Organizational Psychology and Human Service Work

〈Work and Organizational Psychology in human services organizations: different European perspectives〉

開催地 ウクライナ、Kyiv

<http://enop2007.kiev.ua>

2008年6月27日~29日

Second Annual Convention, Asian Psychological Association (APSA)

開催地 マレーシア、Kuala Lumpur

URL: www.apsya.org

2008年7月14日～16日

The 6th International Test Commission Conference

開催地 イギリス、Liverpool

www.intestcom.org

2008年7月20日～25日

XXIX International Congress of Psychology

開催地 ドイツ、Berlin

<http://www.icp2008.de>

2008年7月27日～31日

19th International Congress of Cross-Cultural Psychology

開催地 ドイツ、Bremen

E-mail: k.boehnke@iu-bremen.de

2008年8月14日～17日

116th Annual Convention of the American Psychological Association

開催地 アメリカ、Boston

URL: www.apa.org/convention

2008年8月31日～9月4日

The 4th International Congress on Traffic and Transport Psychology

開催地 アメリカ、Washington, DC.

E-mail: bporter@odu.edu

2009年7月7日～10日

11th European Congress of Psychology

開催地 ノルウェー、Oslo

URL: www.ecp2009.no

2009年8月13日～16日

117th Annual Convention of the American Psychological Association

開催地 カナダ、Tronto

近年、数多くの国際会議やシンポジウムが開催されるようになりました。

例えば、国際人間工学会 (HFES, Human Factors and Ergonomics Society, www.hfes.org) をご覧頂くと、各種の会議案内が掲載されています。

国際交流委員会では今後も情報提供に努めますので、会員の皆様からの国際会議に関する情報提供をお待ちしております。

「応用心理士」認定審査委員会 からのお知らせ

委員長 浮谷秀一 (東京富士大学)

日本応用心理学会認定「応用心理士」認定審査委員会は、平成18年度後期分の資格認定審査を行った結果、以下の16名の方を認定しました。

248	白井 伸之介	249	松田 浩平
250	江川 知香子	251	服部 敬子
252	三島 齊紀	253	竹内 倫和
254	小山 良子	255	加藤 奈保美
256	森脇 保彦	257	高橋 友子
258	遠藤 律子	259	沼井 真理子
260	原 光広	261	佐々木 薫
262	山田 宗寛	263	内藤 哲雄

帝塚山大学心理学科の紹介

中谷内一也

第74回大会準備委員会事務局長

帝塚山大学心理学科は平成16年度に開設されたばかり、生まれたてはやほやの新参者です。大学院・臨床社会心理学専攻も平成18年度にできたので、今年の4月をもって、ようやく学部1年生から4年生、そして、修士課程の1年生、2年生が勢揃いします。

キャンパスは近鉄奈良線学園前駅に直結しています。駅の改札口から大学正門まで徒歩1分、駅から便利に通えるまさに駅便大学です。

学部カリキュラムは「基礎」、「臨床・発達」、「社会・応用」の3領域を中心に組んでいます。1年生、2年生では、人が外界をどのように認識するのか、そのための生理学的基盤や脳のしくみはどうなっているのか、を基礎心理学領域で学びます。それを踏まえて、子供の発達プロセスや心のケアを扱う発達・臨床心理学領域、対人関係や環境・交通などの社会的な問題にアプローチする社会・応用心理学領域へと学びを広げていきます。ゼミ指導は3年生から2年にわたって行われ、学生は2年生後期に自分の関心領域に焦点を定めてゼミを選択し、3年生になってから指導教員とともに卒業研究に取り組みます。

帝塚山大学心理学科の特徴の一つは「心理福祉学部」にあるという点です。相方は地域福祉学科です。不登校や発達障害、ドメスティックバイオレンスなど、心理学の専門家がかわる問題領域は、社会福祉の専門家がかわる領域でもあります。そこで、心理と福祉を結びつけ、両者に触れる中で磨かれる心理マインドと福祉マインドとを相携えて現実問題に向かっていく、そういった人材育成を狙って開設されたのが心理福祉学部なのです。心理学も福祉学も、いずれも独立した学問領域であり、一般に、近接する領域ではかえって連携は困難なものです。しかし、本学の場合、平成18年度文部科学省の現代



アドベンチャーカウンセリングの実習活動の様子

GPに採択された「心のケアとサポート：人材養成と自立支援」という総合テーマのもと、帝塚山大学「こころのケアセンター」とともに、学部全体としてさまざまなプロジェクトに取り組んでいます。こころのケアセンターは、地域社会との連携や市民への心のサポートの観点からキャンパス内に設置された施設で、学外からの来談者の相談に応じています。もちろん、臨床心理学を専攻する大学院生のための教育訓練施設としての機能も果たしています。

帝塚山大学・心理学教室のモットーは「体を動かし、心を知る」です。これは、学生へのメッセージとして、手足を動かして実験や調査、観察等を行うことの重要性を訴えるためのものでした。さらに、アドベンチャーカウンセリング(写真参照)などの実習活動にも力を入れており、本学の教育は、体を動かし続けられるかどうか、体力勝負の一面があります。そして、このモットーの「体を動かし」の部分は、はからずも学科教員の日常を描写するものとなってしまいました。スタッフ一同、研究室の椅子を暖める間もなく、「止まるときは倒れるとき」とばかりに、独楽のようにアドベンチャラスに回り続けている今日この頃です。

事務局だより

事務局長 浮谷 秀一 (東京富士大学)

2007 年版会員名簿の発行について

すでにお手元に届いているかと思いますが、2007 年版会員名簿が出来上がり全会員にお送りいたしました。さらに、発送直前までに会員になられた方の一覧、最新情報に基づいて作成された終身会員一覧および最新版の認定「応用心理士」認定者一覧も別紙で挿入させていただきました。もしまだ届いていないようでしたら事務局までご連絡ください。

会員異動

2006 年度末現在の会員数は下記のとおりです。

正会員	1,045 名
学生会員	2 名
名誉会員	40 名
終身会員	37 名
計	1,124 名
賛助会員	4 社

下記に記載した会員の住所が不明であり、郵便物が届かない状況です。これらの方の住所をご存知の方がおりましたら、事務局 (電話: 03-5389-6491 FAX: 03-3368-2822 e-mail: jaap-post@bunken.co.jp) までお知らせください。

正会員

高橋 晃	山崎 麻里	澤田 和美
佐伯 勝幸	雨宮 一洋	若山 英央
渡部 桂子	布施 晶子	吉田 恒彦
板垣 憲輝	佐久間 直也	熊倉 朋子
松坂 まり子	高田 智子	古川 ひとみ
片岡 健二	中里 茂	マルコン オットー
薛 常慧	斉藤 早香枝	大内 隆
出水 真寿美	蓮見 知恵子	岡村 千鶴
南篠 充寿	椿堂 由紀	月野木 竜也
安川 雅史	楡木 佳子	中尾 彩子
高見 理恵子	鑑 さやか	武田 真弓
服部 隆志	竹中 桂子	小林 桂子
秋元 幸見	武田 繁好	

賛助会員

社会環境研究所

編集後記

新緑の美しい季節となりました。会員の皆さまにおかれましては、お元気にご活躍のことと存じます。春という季節は、新生活への門出の季節ですが、また卒業や退職の季節でもあります。本学会でも長年大学や研究所でご活躍され、この 3 月に定年退職を迎えられた会員がおります。ご紹介する馬場房子先生と垣本由紀子先生は、わが国の産業・組織心理学、交通心理学分野における女性研究者の草分け的存在であり、本学会の発展に大きな貢献をされました。常任理事会の議を経て両先生の最終講義とこれまでの業績の一端をご紹介した次第です。両先生以外にも定年退職された会員の方がいらっしゃることは存じますが何卒ご了解下さい。

会員の図書紹介に関しては、今回は第 3 者による「書評」という形式をあえてとらず、著者である吉田

信彌先生に直接ご紹介いただきました。こうした方がこの本で訴えたいことがより明確に会員の皆さまに伝わると考えたからです。本誌では今後とも会員のさまざまな研究・実践活動をご紹介していきたいと考えております。

本学会は、昨年設立復興 60 周年を迎え、記念事業として事典編纂を行いました。240 名に及ぶ会員の執筆協力を得て作られた事典は、会員のみならず応用心理学研究の発展のために広く役立つものであると確信いたします。本誌では出版記念パーティーでの高嶋正士名誉会員による特別講演についてもご紹介しております。

9 月には奈良の帝塚山大学で本年度の大会が開催されます。着々と準備が進んでいるようです。次号は、本年度大会終了後に発行したいと考えております。

(所 正文)

発行	広報委員会
	委員長 所 正文
	日本応用心理学会事務局
	〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 4-4-19
	(株)国際文献印刷社内
	電話 03-5389-6491 FAX 03-3368-2822